

[果樹部門]

7. ブドウの新品種「シャインマスカット」

[要約]

(独) 農研機構果樹研究所が育成したブドウ「シャインマスカット」は無核栽培が容易で、黄緑色で果粒が大きく、肉質が締まり食味が優れることから有望である。

[担当] 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

黄緑色系の新品種として有望な「シャインマスカット」の生育及び果実品質の特性を明らかにし、県内への導入に資する。

[成果の内容・特徴]

○品種の特性

1. ジベレリン及びストレプトマイシン剤による無核化処理により無核栽培が可能である。
2. 樹勢が強く、副梢の発生が収穫後まで認められる。
3. 発芽期は「ピオーネ」より6日程度早く、開花期はほぼ同時期である。果粒軟化期は「ピオーネ」より7日程度遅い。成熟期は9月上中旬で「ピオーネ」と同時期かやや遅い。落葉始めは「ピオーネ」より20日程度遅い(表1)。
4. 果皮色は黄緑色で、果形は短楕円、果粒は15g程度の大粒である。糖度は19～20度と高く食味が優れる(表2)。マスカット香があり、肉質が締まり、酸味は少ない。
5. 病害の発生は少ない傾向である。
6. 若木時は果粒肥大が劣る傾向がある(表2)。
7. 成熟期に果皮表面が褐変する症状が発生することがある。
8. 生理障害(縮果、日射)の発生は少ない。
9. ハウス及び簡易被覆(トンネル)での栽培が可能であり、果実品質が優れる(表3)。

○生産目標及び栽培の留意点

1. 生産目標は、葉面積指数(LAI)が1.9～2.2程度、果房重600～700g、果粒重13g以上、糖度18度以上、10a当たり収量は2.1～2.4tとする。
2. 「ピオーネ」と同様の無核化処理では、有核果が混入しやすいため開花前にストレプトマイシン200ppmを花穂に処理する。
3. 「ピオーネ」に比べて着粒が不安定であるため、満開～満開3日後にフルメット5ppm加用ジベレリン25ppm液、満開15日後にジベレリン25ppm液で処理する。
4. 花穂整形は、花穂先端部を4cm程度残す。果房整形は、果房先端部の果軸長を7～8cm程度とするが、先端部が使えない場合には先端を切ってもよい。ただし、先端部を3cm以上切りすぎると果房が横に張った房形となりやすい。
5. 上記の生産目標を達成した場合の収穫始めは果粒軟化49日後である(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 県内限定の「シャインマスカット」技術対策資料を作成する。

[具体的データ]

表1 「シャインマスカット」の生育ステージ (農試場内)

品 種	発芽期	展葉期	開花期			果粒 軟化期	成熟期	落葉期	
			始	満開	終			始	終
シャインマスカット	4/17	4/25	5/28	6/2	6/6	7/19	9月上中旬	11/13	11/26
(参考) ピオーネ	4/23	4/30	5/28	6/1	6/7	7/12	8月下旬～9月上旬	10/25	11/23

注) 2002～2008年の7年間の平均値

表2 「シャインマスカット」の果実品質 (農試場内)

栽培年度	樹齢	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (Brix)
2002	4	483	11.3	20.4
2003	5	560	13.2	17.1
2004	6	459	13.0	19.1
2005	7	756	16.2	19.9
2006	8	766	15.9	20.6
2007	9	815	14.8	19.3
2008	10	812	18.4	20.5

表3 「シャインマスカット」現地試験圃場の果実品質 (2008年)

地区	樹齢	作型	調査日	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (Brix)	無核果粒率 (%)	裂果粒数 (個/房)	果皮障害粒数 (個/房)
岡山市	4	補助加温 (発芽後加温)	9/22	663	15.3	22.0	100	0.0	0.0
倉敷市	4	3月加温	8/6	782	17.7	17.2	100	0.0	0.0
倉敷市	4	トンネル	9/10	949	12.7	20.7	100	0.0	1.0
総社市	4	トンネル	9/19	624	14.1	23.6	100	0.3	0.5
井原市	4	3月加温	8/6	812	14.9	18.9	100	0.0	0.6
久米南町	4	トンネル	9/19	681	15.1	19.0	100	2.6	0.0

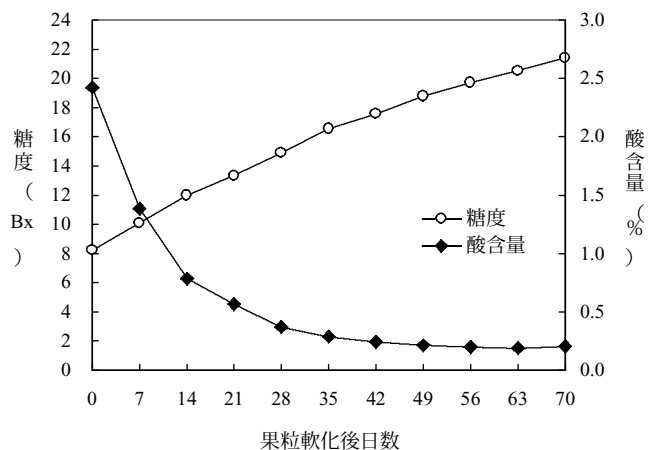


図1 「シャインマスカット」の糖度及び酸含量の推移

注) 葉果比 (m²/kg) : 0.9、2007年と2008年の2樹平均

[その他]

研究課題名: 「シャインマスカット」の高品質安定生産技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 2005 ～ 2008 年度

研究担当者: 尾頃敦郎、倉藤祐輝